

君のために僕がいる

C o n t e n t s

君のために僕がいる 5

Happiness —愛し愛される幸福— 251

君のために僕がいる

「こちら、名原明良さん。検事をしていらつしやるの」

高級ホテルのラウンジで、万里緒は叔母が勧める見合いの席についていた。叔母がセッティングした見合いに挑むのは、これで何度目だろう。たぶん五度目だ。

目の前の叔母は手慣れた様子で、この場を仕切っている。

「名原さん、こちらは姪の藤崎万里緒です。歳は三十で、E大学付属病院で内科医をしているんです」

万里緒は、正面に座っている男性の顔をこっそり窺う。

ここ最近、とにかく仕事が忙しくて釣書きを見る暇もなかった。今日なんか当直明けて二時間しか寝ていないのに、無理矢理起きて化粧をし、慣れないヒールを履いてこの場にやって来たのだ。そうまでして、ムキになって見合いを受けたのには訳がある。

以前、叔母に言われた一言が原因だった――

『あなたは医者さんとして自立しているかもしれないけど、それだけじゃ女の幸せを得たとは言

えないわ。一人の女として愛されないなんて、寂しい人生よ』

そして最後に「ふふふ」と嫌味に笑ってみせた叔母にキレて、見合いを受けたのだ。

「そんなに言うなら、次の見合いで決めてやる。イイ男を持つてこないと承知しない」と啖呵を切ってしまった。

万里緒の家は医者一家だ。父も母も現役の医者で、藤崎病院という二百床ほどの私立病院を経営。弟もそこで、歯科を担当している。

父の妹である叔母が嫁いだ先も、胸部外科で有名な私立成瀬病院だ。そこの長男と見合い結婚をした彼女は、院長夫人として夫を支え、一人息子を医者に育て上げた。

子育てが一段落した今、優雅な生活を楽しむ傍ら、仲人をすることを趣味としていた。そして、姪の万里緒の顔を見るたび、見合いをしろ、とうるさく言うのだから、世話焼きババアもいいところだ。

今日も叔母は、自分が見合いをするわけでもないのに、綺麗な着物を着て、髪の毛もしっかりアップで決めている。

「それでは私、夫に言いつかった用事がありますので、これで失礼します。あとはお二人でゆっくりとね」

叔母はそう言って、笑いながら席を立つてしまった。万里緒は『相手のことを何も知らないのに、何を話せばいいのよ』と思いながら彼女を見送り、内心ため息をついた。

すると、お相手の名原が口火を切った。

「万里緒さんって、珍しいお名前ですね」

にこ、と笑うその顔は、検事に相応しく誠実そうで、優しさが滲み出ているような表情だった。「イイ男でないと承知しない」と言った万里緒の要望に適う素敵な人。ただ、ちよつと神経質そうだ。

それに、珍しい名前と言われるのは、あまり好きではない。

万里緒という名は、たしかに珍しい。そのせいで、学校でからかわれた記憶がある。名前にまつわる嫌な思い出が蘇る。

なんだか今回もあまり気乗りがしない。イイ男だとは思うけれど、ただそれだけじゃ満足してやらないぞ、という気持ちが無クムクと湧いてくる。

進めたくない見合いだな、と思う。

「両親は、人と違った名前にしたいと思ったらしくて。弟もちよつと変わった名前で、瑠維次というんです」

「それはまた面白いですね」

それきり、会話は止まってしまふ。

万里緒は「それで？」と言いたかったけれど、何も言わず、目の前のケーキを口に含んだ。疲れた身体に染み込むような甘さで、とっても美味しい。

「次で決めてやる」と言ったのに、何をやってるんだか。まったく決めてやることができなかった。

* * *

「三号室の患者さん、血糖値が落ち着かないから一日四検してください。で、内服薬出しておいたから、食前に飲ませるようにお願いします」

万里緒はカルテにそう書いて看護師に渡した。が、思わぬ言葉が返ってくる。

「先生、糖尿病内科に診せたほうがいいんじゃないですか？」

万里緒はちよつとムツとし、すかさず反論した。

「この内服薬で血糖値が治まるようなら、しばらく続けていこうと思うの。そうじゃなければ、糖尿病内科に診てもらいます。私の指示に、何か文句ある？」

「いえ、そういうわけでは」

「じゃあ、指示通りをお願いします」

万里緒はスツールから立ち上がり、看護師に背を向けた。そして三号室に足を運び、患者さんに、投薬を始めることとなった経緯を説明する。最後に「内服薬の準備ができ次第、看護師が持ってきますからね」と言うと、患者さんは「わかりました」と応じた。

万里緒が病室を出てナースステーションの前を通りかかると、看護師二人が抗議の声をあげていた。

「藤崎先生って、カワイイし仕事できるけど、頑かたくなよね？ さっきなんて『私の指示に文句ある？』って言われちゃった」

「先生にも考えがあるんだろうけど、でも……」

それを聞いて、イラッとした。考えなしに薬を選ぶわけではない。

万里緒は堂々と、看護師二人の話に割って入った。

「患者さんには、すべてをきちんと説明して納得してもらっていますよ。あなたたちは薬の副作用に留意していてね」

看護師二人はヤバイという顔をし、「はい」とだけ答えた。

「それじゃ、お願いします」

万里緒はその場をあとにした。

一生懸命やっけていても、こんなふうに陰で悪口を言われるなんて割に合わない。

ああ、ストレスが溜まる。

その上、デスクの上は未整理のカルテが山積みだ。今日も帰りは遅くなるだろう。

忙しすぎて、私生活なんてあったもんじゃない。

ましてや、恋愛だの結婚だのと言ってられない。

昨日は見合い後、帰宅してすぐ爆睡したから、夜中に目が覚めてしまった。

おかげで今日も寝不足だ。

まったく本当に何をやってるんだか、と肩を落としながら医局へ向かう。

その途中、先輩医師に呼び止められた。

「今日新患しんかんが来るんだけど、藤崎、お前が担当してくれな？」

「は？ え？ でも、外来診察したのは……」

「俺、重症患者が二人もいて手一杯なんだよ。よろしく頼むよ、検査入院だから」

自分の患者なんだから自分で診みるよ！ と心の中で悪態をついたが、医師歴十五年のベテランである彼に、医師歴やつと五年目の万里緒は何も言えなかった。

「わかりました」

「ありがとなー、さすがスーパー●リオ！」

万里緒が自分の名前にコンプレックスを感じてしまうのは、このせいなのだ。子どもの頃から、何度からかわれたことか。父が某ゲームキャラの大ファンという理由で、名前をつけたのだが。

万里緒はさらに肩を落とした。

カルテ整理はなかなか終わらなかった。量が多いせいもあるけれど、叔母の顔がちらついて仕方なかったからだ。

『万里緒ったら、次は決めてやると息巻いていたくせに、見合いをした翌日、先方から断られるなんて、一体何がいけなかったのかしら？ まあ、しょうがない。今度また、いい話があったら持つてくるけどね』

先ほど叔母から電話がかかってきて、そう告げられた。

最後はいつも通り、「ふふふ」と嫌味な笑いを漏らしていたつけ。

「もうちよっと、可愛い女にならないとね」と、叔母は言外に匂わせていたのだ。

そんな叔母に対し、「可愛くなくて悪かったね」と内心で毒づく。

午後八時近くまで頑張っても、カルテ整理はいつこうに捗らなかつた。

万里緒はひどくお腹が空いていることに気づき、何か食べに行こうと、白衣を脱いで立ち上がった。

愛用のローヒールをカツカツ鳴らし、病院の外へ。

つい、ため息を零して空を見上げると、星は二つか三つしか見えなかつた。東京の空は明るいので、星の光が薄れてしまうのだろう。

しばらく歩き、万里緒は路地裏の食堂に入った。そこは夜勤明けに偶然見つけた店で、昼は五百円、夜は七百円で日替わり定食が食べられるのだ。あまりにも驚いて「こんなに安くていいの？」と店主に聞くと、「儲けはある程度出てるから、大丈夫」と笑われた。以来、この店を気に入って、たまに足を運んでいる。

「こんばんは」

「いらつしやい。いつもの日替わり定食でいいかな？ 今日は塩サバか、豚の生姜焼きの二種類から選べるよ」

「それじゃあ、豚の生姜焼きをお願いします」

万里緒はすっかり常連なので、店のおじさんとおばさんが気易く声をかけてくれる。

「なんだか元気がないみたいだな。疲れてる？」

「ですね……まだ仕事が残っているけど、今日はもうやめちゃおうかな……」

明日は休みだから、ゆっくり寝坊をして、夕方にでもカルテを片づけに来ればいいか、と思えてきた。

「おじさん、私、荷物取ってきます。五分くらい待っててくれますか？ この席、取っておいてください」

万里緒が頼むと、おじさんもおばさんも、「いいよ。行つといで」と快く引き受けてくれた。

いつもこんな感じだから、何度でも通いたくなるのだ。ここでは他人の顔色を窺ったり、嫌味な噂話や陰口を気にしたりする必要がない。この店は、万里緒にとって癒しの場所とも言える。

急いで病院に戻り、バッグを手に、ふたたび食堂へと向かう。

すると、ちょうど料理ができ上がったところだった。

美味しそうな匂いが胃を刺激する。すぐに箸を取り「頂きます」と言つて口に運んだ。

「今日はビールも飲んじゃおうかな。ジョッキでお願い」

万里緒が言うと、おじさんがすぐに用意をしてくれた。

「明日は休みなのかい？」

「そうなんです」

ビールはよく冷えていて、とても美味かった。喉をぐびぐび鳴らして飲む。

そうしてふと、斜め前の席を見ると、庶民的な定食屋には不似合いの、いかにも高級そうなスーツに身を包んだ男性客がいた。食堂の隅に置かれたテレビを見ながら、塩サバを摘んでいる。目はくるんとしていて、唇はアヒル口という愛嬌のある顔立ちで、品の良さが感じられる、イイ男だった。

テレビを見ながら時々笑みを零す口元が、とくにキュートで可愛い。

素敵な人だなあ、と心がホワッと温かくなる。

そうは思つても、ここで万里緒のほうから話しかけてもしない限り、彼と知り合いになるチャンスはないだろう。

万里緒は医師という職業柄、気ばかり強くなつていくが、実はあまり積極的なタイプではない。今、目の前にいる男性にときめきを感じているのはたしかだけれど……

歳はいくつぐらいだろう。

どんな仕事をしているのだろう。

ああいう素敵な人には、きっと美人で可愛い彼女がいるんだろうな。

あれこれ思いを巡らせる万里緒をよそに、斜め前のイケメン君は、彼女のことなど気にも留めていない様子だ。

「おじさん、もう一杯」

万里緒はビールを飲み干し、二杯目を頼んだ。疲れているせいか酔いが早い。それでも飲みたいから飲む。

「マリちゃん、大丈夫かい？」

「平気ですよ」

運ばれてきた二杯目を一口飲むと、胸がスツとした。

たまにはこんなふうに一人で飲むのもいいな。

仕事のストレスが溜まっても、グチグチしていないで、食べて飲んでさっぱり忘れるのがいい。

そうして二軒目に行こうかな、と考えていたところで、携帯電話が鳴った。嫌な予感がしたが、案の定だった。

『五号室の患者さんが腹痛を訴えています』

「わかったわ。腹痛が治まらないようなら、ペンタジンを投与してください」

『承知しました』

簡単なやりとりを済ませ、電話を切る。

すると、テレビを見ていたイケメン君が万里緒のほうを振り返って話しかけてきた。

「お疲れ様です」

「はあ、どうも」

「ドクターですよね？」

「はい……よくわかりますね」

「話の内容から、そう思いました」

イケメンでキュートな彼は、そう言つて箸^{はし}を置き立ち上がる。

「ごちそうさまです」

そのままレジへ向かい、代金を支払う。それからもう一度万里緒のほうを見て、「お仕事、頑張ってください」と微笑^{ほほえ}んだ。

彼が食堂の引き戸を開けて出て行く姿を見ながら、万里緒はビールをすべて飲みきった。

「おじさん、私もごちそうさま」

「はいよ、ビール三杯と定食で千二百六十円ね」

万里緒は会計を済ますと、急いで店を出た。どうしても彼を追いかけてしまったのだ。

だが、すでに彼はいなかった。

肩を落とす万里緒の背後でガラリ、と引き戸を開ける音がした。次いで、店主のおじさんが首を出して辺りを見回し、はぁーと大きなため息をつく。

「どうしたの？ おじさん」

「いやね、さっきのカッコイイお客さん、携帯電話を置き忘れていったんだよ……初めてのお客さんだから、連絡のとりようもなくてなあ」

「ええ!? そんな大切なものを？」

携帯電話なんかなくした日には、万里緒だったら絶対に仕事に支障をきたす。彼も恐らく、ものすごく困るに違いない。

おじさんが困惑顔で握りしめている彼の携帯電話は、最新型のスマートフォンだった。

「これ、どうしよう」とおじさんがぼやいていると、コツンコツンと硬い靴音が路地裏に響いた。見ると、彼だった。

「あ、やっぱり店に置き忘れていたんですね。すみませんでした」

おじさんは携帯電話を持ち主の手に返し、ほっとした表情で店に戻った。

イケメンの彼は、万里緒に向けてもう一度、「ご心配をおかけしてすみませんでした」と頭を下げた。

「いえ、そんな。私は別に何も……」

「お帰りですか？」

「はい」

「じゃあ、そこまで一緒に行きましようか？」

そう言って彼は、大通りの方角を指さした。

思わず追いかけたくなってしまったキュートなイイ男。連絡先を自分から聞く勇氣はないけれど、少しの間、一緒に歩けるだけでも嬉しい。

「帰りはいつもこの時間なんですか？ 随分遅いですね」

彼の声は、少しだけ掠れた、低音ボイス。低すぎず、ちょうどいいくらいのトーンだ。声を聞いただけでも心がホワッと温かくなる。

「病院勤務なので、これくらいは普通です。それに、まだ医者になってやっと五年というところですから」

「医師は忙しいし、大変ですよ。早く帰って寝たほうがいい。そうすればきっと、頭がすっきりしますよ」

そう言って、につこり微笑んだ顔について見惚れてしまった。ますます彼のことが気になりました

万里緒だったが、楽しい時間はすぐに過ぎ、大通りが見えてきた。

——思い切って二軒目に誘うべきか、誘わないべきか。

ほんの数秒考えて、誘うのはやめた。というか、タイミングが掴めなかった。

「では、気をつけて帰ってください」

「はい」

万里緒とは反対方向へ去っていくキュートな彼。背が高く、足も長い彼のうしろ姿を見送った。

「お尻の形もキュート……キュッと上がってて、可愛い」

ああ、やっぱり勇氣を出して誘っておけばよかったかなあ。

万里緒はいつもこうだ。気に入る相手がいても、アピールできずに終わる。

「優しい言葉をかけてくれたし、素敵な人なんだろうな。それにスマートでスタイルもよかったな」

万里緒は、無意識のうちに高級スーツの中身を想像している自分に気づき、顔がかっと火照った。初めて会った男性の、服の中身を想像するってなんだろう。

でも、もう会うことはないんだろうな。そう思うと残念でならなかった。

数週間後、万里緒のもとに、またしても叔母が見合い話を持って来た。なんてお節介^{せつかい}なババアなんだろうとうんざりしながら、それでも断りきれなかった万里緒は今日も有名ホテルのレストランに向かっている。

「万里緒、今度こそ決めるでしょうね？ あなたの要望通り、またイケメンだからね」

嫌味つたらしく、「イケメン」と強調する叔母を見て、万里緒はため息をついた。

「叔母さん、私、時が来たらいい人捕まえて結婚する。でも今はまだ医者として駆け出しの身だから、仕事が優先。お見合いは、これで最後にしてくれる？」

「……藤崎家の娘がいつまでも独身でいちゃダメよ？ 仕事をやめるとまでは言わない。でも、早く結婚して家庭をつくるのもあなたの役目。あなたたち姉弟のうち、医者になったのは万里緒だけなんだから、あなたが跡取りなのよ？」

叔母が言う通り、瑠維次は藤崎家の長男とはいっても、藤崎病院の跡取りとは言いにくい。しかし、瑠維次のお陰で病院に歯科を開設することになり、病院は新たな患者を獲得しているのだから結構なことじゃないか。そんなことを考えながら、万里緒は叔母の話を聞き流していた。

この前の検事との見合いの時、万里緒はスーツを着ていた。それがよくなかったのだと叔母に注

意されたので、今日は淡い紫色の着物を着てきた。

すでに先方は待っている、と言われて急ぎ足でホテルの中を歩く。

そうして息せき切って出向いたのだが、予約してあった席に見合い相手の男性はいなかった。飲みかけのコーヒーが置かれているだけだ。

「あら、どうしたのかしら？」

「怖くなって逃げた？」

万里緒が言うと、帯のあたりをパン、と叩かれた。

「そんな人じゃないわよ。今度のお相手はね、あなたと同じお医者さんなんだから」

「へ？」

「あなた、お見合い写真を見てもいないんですよ？ 釣書きだつて読もうとしないし、人の話は聞かないし、まったくもう……」

「ばれちゃった？ すみません」

「相手の方はね、うちの息子の指導医だった方なんですけど、ものすごく評判のいい先生なのよ。……こうしてお見合いしてくれることになったのも、うちの主人が八方に手を回して頼んだからよ」

叔母が、くどくど言う。万里緒はうんざりしながら予約席に腰掛けた。

万里緒の目の前には、コーヒークップが一客だけ置かれている。どうやら彼は一人で来たらしい。

『私も一人で来たかったな、そのほうがまだ気が楽だった』と思う。

そのとき、聞き覚えのある声があった。

「すみません、緊急の電話が入ってしまったもので……」

万里緒は目を見開き、それからパチリ、と大きく瞬きをした。相手の男性は微笑みながら、じつとこちらを見ている。

「まあ、緊急電話だなんて！ 患者さんに急変でも？」

叔母がやや大げさに心配げな声を上げる。

「いえ、以前の病院からの電話で、入院患者のことで聞きたいことがあるから、と……」

そう説明しながら、彼は万里緒に視線を戻した。

この前の、食堂で会った彼だった。整った顔立ちで、ヒップラインとアヒルっぽい唇がキュートなあの人物。

日の光の下で見る彼は、あの夜出会ったときよりも、なんだかキラキラしていた。

彼は万里緒の前に座り、自己紹介をする。

「初めまして、星奈千歳です」

にこりと笑った顔は万里緒の心をキュンとさせるくらい素敵で可愛くて、カッコイイ。眼尻にある皺さえ魅力的だ。

可愛い名前だな、と万里緒は思った。

しばらくボーッと見ていると、叔母が万里緒の袖を引っ張る。

「あ、あ、初めまして、藤崎万里緒です」

しどろもどろになりながら、ようやく名前を告げた。

「まあ、この子ったら先生に見惚れちゃって。先生、よかったら二人でお話をなさってくださいな。そのほうがよろしいわよね」

ほほほ、と笑って席を立つ叔母を見て、え!? と慌てる万里緒。そんな万里緒に、叔母は素早く耳打ちをした。

「この人を必ずゲットしなさい」

聞こえてんじやないの? と思って彼、千歳を見ると、下を向いて苦笑していた。

「では、ごゆっくり」

叔母は万里緒を置いて店を出ていった。

何を話せばいいの、どうすりゃいいのよ、と万里緒は固まってしまった。すると彼が、例の路地裏の食堂の話を切り出してきた。

「あの店、よく行くんですか？」

「あ、はい、ですね。我ながらいい所を見つけたなあ、と思ってます」

ごく自然に会話がスタートしたけど、こんな受け答えで大丈夫だろうか? 万里緒はちょっと不安だった。

「僕もいい店を見つけたと喜んでいたんですよ。あの日、E大へ挨拶に行ったんです。その数日後、藤崎さんもE大で内科医をしていると貴女の叔母様から聞きました」

「あなたもE大に勤務にされているのですか？」

「ええ。消化器外科です」

これには驚いた。消化器外科ならば、万里緒がいる消化器内科と接点が多い。患者紹介をして外科で手術、という連携もよく行われる。

「ところで、写真で拝見するよりも、なんだか痩せてますね」

「ああ、最近ちよつと。あれ、半年前の写真なので」

「どうして見合いを？」

「叔母が何回もしつこく話を持ってくるので……いえ、結婚を勧めるものですから。私の家、病院なんですけど、私が跡取りだとか言われて……あまりピンと来ていないんですけど……」

「そうですか」

うなずきながら、彼はコーヒーを口にした。万里緒もコーヒーで喉を潤す。

そういう千歳こそ、どうして見合いなんか承知したのだろう。

「星奈先生は、どうして見合いを？」

「お世話になった教授から、会ってみないかと言われたので。私立病院のお嬢さんだからと薦められたのですが、跡取りとか、そういうことに僕はまったく興味はなくて……」

「そうですか」

どうやら彼は断れない事情があつて、渋々承知した見合いだったようだ。

万里緒はキュートな彼にこうして再会することができ、ちよつと浮かれ気分になったけれど、彼にその気はないらしい。

今回もダメか。

そう思っていると、彼は笑顔で言った。

「藤崎先生は、僕をゲットする気で来たんですか？」

「は!? いいえ! あれは、叔母が勝手に言ったことであつて……。たしかに私は三十になつて周りにうるさく言われ始めたし、自分自身も結婚したいとは思っています。でも相手の方にも好みがありますし、無理強いする気はないです」

必死さを隠すために、緩く笑いながら、そう答えた。

千歳はコーヒーを飲みつつ万里緒の話を聞き、それからこう言った。

「ご実家の病院を継ぐ気はあるんですか？」

「いいえ。弟がいますし。歯科医師ですけど、弟が継いでも問題ないと思います。ダメなら、弟が医師の女性と結婚すればいい話ですから」

「そうですか」

目線を上げて千歳を見ると、やっぱりキュートで整ったイケメンぶりに胸がキュンとなる。

いつも気になる相手ができてアピールをせずに終わってしまう万里緒だが、このチャンスをしたくない。でも、何も言葉が出てこない。しょうがないから、思いつくまま名前の話をしてみた。

「私の名前、万里緒なんですけど、弟は瑠維次なんですよね」
それを聞いて千歳は、はは、と声を上げて笑った。そして、クルリとした目を瞬かせながら聞いてくる。

「スーパードリット？」

「そう、よく言われるんです。先輩の医師からも『よろしく頼むよ、スーパードリット』って」
何を言ってるんだ、私は。わけのわからない笑みを浮かべる。

「それで万里緒さんは、こうやって見合いをして、お互い気に入ったら、結婚をする気はあるんですか？」

「はあ、まあ、そうですね。どちらかと言うと、私は受け身なので……相手の方が進めてくだされば、ですね」

「相当受け身ですね」

千歳は、にこりと笑って小さくため息をつく。

まずい。万里緒は焦った。さつきみたいな言い方をすれば、どうでもいいと思っているようにとられてもおかしい。

「男の人は、可愛い女の子が好きですよ？ でも私は職業柄もあって、気が強くなるばかりで。

だから、こういうことは受け身なのがちょうどいいと思うんですよ。どうでもいいというわけではないんです……なに言ってるか、自分でもわかんなくなってきました」

どんどん墓穴を掘っている気がして、下を向いてしまう。

この見合いは、失敗だな。万里緒が一人落ち込んでみると、千歳は意外なことを言った。

「この間、大通りで別れたあと、去りがたくて振り向くと、あなたはすでに背中を向けて歩いてました」

「え？」

万里緒は自分のことを言われているのだと気づくまでに時間がかかった。あの日、千歳は万里緒のことを気にかけてくれたというのか。だとしたら、なんてラッキー！

それに、千歳はこんなことも言うのだ。

「気になったので呼び止めようかと思ったものの、やめときました。病院近くの食堂で会ったのだから、たぶん僕と同じ病院勤務のドクターだろうと思って。それなら、この先も会う機会はたくさんありますからね」

「同じ病院で働く医者だから、気になったんですか」

「そうじゃなくて、藤崎先生みたいに、食堂でビールを片手に『おじさん、もう一杯』ってやってる人、結構好きなんです。僕は、可愛いだけの女性には興味がないので」

「いや、あれは、その、疲れていたの。お酒でも飲んで気晴らししようかと……」

「いつもあややって、一人で？」

「まあ、そうですね。バーとかで飲むこともありますけど、居酒屋のほうが好きです。ちなみに、お酒で一番好きなのは青島ビール^{チンタキ}。苦みが少なくフルーティーで……でも青島ビールを出す店あまり知らなくて……行きつけは、ちょっと汚い中華料理屋さんなんですよ」

何を言ってるんだよ私は、と万里緒は心の中で自分にツツコミを入れた。

これほどまでに好意的な会話ができた見合いは、過去に一度もないのに、どうして青島ビールが好きだなんて、オヤジみたいなことを言ってしまったのか。自分のバカ、バカ。雰囲気がち壊しじゃないか。万里緒はさらに自分にツツコミ。

「いいですね。その店、今度連れて行ってください」

「へっ？」

「そういう店の料理って、どれもたいてい美味しいですよ」

「ええ、まあ」

「このあと時間があるなら、さっそく行ってみるのもいいですね。でも、着物を汚しちゃうとまずいかな」

「着替えてきます」

万里緒は間髪容れずに言った。珍しいことに、今日は積極的に行動できる。

「じゃあ、僕も楽な格好に着替えてようかな……その店、どこにあるの？」

「病院の近く、です」

「同僚のドクターやナースにばったり会ったりしない？」

「今まで出会ったことないから、たぶん大丈夫です」

あまりにも気取りのない店なので、医者や看護師たちは好まないのかもしれない。圧倒的に男性客、とくに肉休労働者が多く、仕事帰りに作業着姿のまま立ち寄る姿をよく見かける。万里緒のように女性のお客が一人で来るのは初めてだ、と店の主人が言っていた。

「そうですか。なんか本当に、藤崎先生って面白いですね。……じゃあ行きましょうか？ その前に連絡先を交換しておきましょう」

千歳はそう言い、携帯電話の番号が書かれた名刺を差し出した。

千歳は万里緒を気に入ってくれたのか？ それとも、ただの好奇心……？

とにかく、二人はわりといい雰囲気です。青島ビールを飲みに行く流れになった。

お見合い六回目にして、ついに世話焼きババアが本物を持ってきたのかもしれない。

いったん解散し、それぞれ自宅に着替えた後、ふたたび駅で待ち合わせた。

千歳は、シャツとチノパンというカジュアルスタイル。万里緒は緩めのデニムをロールアップして、靴はヒールのないバレエシューズを履いてきた。

そして二人は、目当ての中華料理屋に向かう。

店に入り、向かい合って座ると膝と膝がぶつかってしまうような狭い席に腰を落ち着け、まずは、青島ビールを注文。お目当ての品が届くと、千歳が万里緒のためにビールを注いでくれる。次は万里緒が注ぐとして手を伸ばすと、千歳はそれをやりわり断り、自らの手でグラスを満たした。

「乾杯」

カチン、と音を立ててグラスを合わせる。ごく小さなグラスなので、一気にグイッと飲み干せる量だ。

「あ、青島ビールってたしかに苦みが少ないかも」

「そうでしょう？ 飲みやすいんですよ」

それから二人は、小さなテーブルの上に並べきれないほど料理を注文した。エビチャーハン、蟹のあんかけ、ギョーザ、酢豚。どれも美味しいので、品数を絞ることができなかったのだ。

「穴場だなあ。それにしても藤崎先生、本当に一人でここへ？」

「はい。びつくりしますよね？ 星奈先生はこういうところ、あまり来なさそうだし」

「やっぱり、藤崎先生って面白い。それに結構男前な感じですね」

「男みたいっていいことですか」

「そうじゃないけど、藤崎先生、男友達多いでしょ？」

「ああ、わりと多いかもしれせん」

「だと思った」

千歳が笑うと、眼尻に皺ができる。そんなところに大人の魅力を感じるけれど、顔そのものは少年っぽい印象だった。

「あの、事前に叔母からあまり聞かされていなかったんですが……星奈先生って、お歳は、いくつなんですか？」

「僕ですか？ 三十六ですよ。もうすぐ三十七。オッサンですみません」

「いや！ そんな歳に見えないです！」

万里緒が慌てて首を振ると、千歳は苦笑しながら言葉をつけ加えた。

「自分で言うのもなんですが、いつも実年齢よりも若いって言われます。童顔だからかな。職業柄、幼く見えてしまうのは辛いことです」

「あの、星奈先生、敬語はやめませんか？ どう考えても私、年下だし、医師としても後輩ですから。ちなみに、先生もいらないです」

「だったら君も、先生はよして？」

「いや、私は星奈先生と呼びます。これから病院でお世話になることも色々あるだろうし」

千歳は、「そう」と言って肩をすくめた。

現実には、消化器内科と消化器外科は連携プレーが多いのだ。たとえば、内科を受診した患者の疾患に対して手術などの必要性があれば、外科に紹介し、そのまま外科で手術、ということもある。内科と外科の医師が何度も話し合いや相談の場を設けることもある。

「あ、でも星奈先生、今日は仕事のことは忘れましょう」

「そうだね、せっかく美味しいビールと料理を楽しんでいるんだからね」

「この蟹のあなかけをチャーハンに乗せて食べると絶品ですよ。かけてもいいですか？」

そう万里緒が聞くと、千歳はうなずいた。

「へえ、こうやって食べるんだ？ 初めて知った。あ、ほんとに美味しい」

「でしょう？ これで、青島ビールがますます進むですよ」

そう言ってしまうってから、『やだ、私ったら、またオヤジみたいなこと言ってる』と気づき、ちよつと後悔した。けれど、千歳はちつとも気にしていない様子で、チャーハンを食べながらギョーザ、酢豚もどんどん平らげていく。

「ここ、たしかに美味しいね。仕事帰りに、また来ようかな」

「お店の雰囲気は大丈夫ですか？ 私は好きですけど」

「うん、僕も結構好きだよ。こういう店に女の人が一人で通っているっていうのは意外だったけどね」

そんな話をしながら、青島ビールを飲み続けた。相変わらず美味しくて、つい一口でグラスの半

分以上を空けてしまう。すると千歳がすかさず、万里緒のグラスにビールを注いでくれる。

「星奈先生もこの店を気に入ってくれたようでよかったです。内心ホッとししました」

「ホッとしたの？」

「はい。この前の見合いの相手は、高級レストランが好きそうな感じの人だったんですね。好きな食べ物はフランス料理で、自分でもこだわって作るとかなんとか……」

そんな話を始めると、コツ、と左膝に少し強く当たるものがあつた。ちよつと動いただけで膝と膝がぶつかってしまうような至近距離にいるから？ でも今のは、意図的に膝をぶつけられたような気もする……

不思議に思つて会話を止めると、千歳が万里緒を軽く睨んでいた。

「今日見合いした相手の前で、前の見合い相手の話は禁句じゃないか？」

「あつ、すみません」

「謝るほどじゃないけど、君は男の前ではかの男の話を平気でするタイプ？」

「ま、そうですね。男友達のこととか普通に……いけません？ 友達だから恋愛対象外ですよ？」

千歳は苦笑いしながら「そっか」と言った。

「気にするほうがどうかと思いますよ。前回の見合い相手のことも、本当に恋愛対象外ですから」言ってしまったから、万里緒ははつとした。「あんたはものの言い方がきつい。言葉に棘があ

る」と、いつも母に注意されているのだ。

「すみません。今の言い方、気に障りました？」

「別に。ただ、君はさっぱりとした性格なんだなって思うだけ」

「ええ、まあ、そうかもしれません……」

「それで、彼氏はいないの？」

「彼氏がいたら、星奈先生とこうして会うことはなかったでしょう。少し前に別れました」

「へえ、どうして？」

「わざわざ理由を聞くか？　と思ったけれど、万里緒はその質問にも応じることにした。

「元彼は会社員だったんですけど、いつも私に愚痴^{ぐち}つぽく言っていたんです。俺はしがないサラリーマンだって。あとそれから、私の給与明細を見て、その辺の男より稼いでるとか、格差^{かくさ}があり過ぎるとか。私だって、何もせずにこの職を得たわけじゃないのに。努力もしたし、きつい思いだっしてきた」

「そうだね。研修医は、眠る時間もなくてきついよね。僕も、あの時代には戻りたくないな」

「でしょう？　そういう時期を乗り越えたから、今があるんです。今だって、それほど自分の時間があるわけじゃない。それなのに、元彼は私の仕事を理解してくれないどころか、当直が続いたりしてしばらく会わなかったら、部屋に女の子を引っぱり込んでたし。あんな男、別れて正解」

言うだけ言うと、なんだかスツとした。けれど言い終えてから「あ、しまった」と思った。そう

は言っても、後の祭りだ。

初対面の見合い相手、しかもこれから仕事上接点があるだろう先輩医師に、元彼のことをあらうざらい愚痴^{ぐち}ってしまった。

しかし千歳は、万里緒を見つめてただうなずくだけ。

「僕の同期の女医も、君と同じようなこと言ってたよ」

「それで、その女医さんは、その後どうされたんですか？」

「彼女に相応^{ふさわ}しい相手と結婚したよ」

「相応^{ふさわ}しい相手、ですか？」

「医者とお見合い結婚したんだ。医者同士が結ばれる例は、結構多い」

「ですよ、やっぱり」

万里緒が同意すると、千歳はにこりと微笑^{ほほえ}んだ。彼の笑顔を見ると、万里緒は心がホワツとする。「しかし、ほかに女がいたなんて、君も可哀^{かわ}そうに」

「そうなんです。しかも浮気現場を目撃しちゃった。裸で抱き合つてるところを見ちゃったんです。あつ、すみません、初対面なのに色々愚痴^{ぐち}ってしまったて」

「そんなこと、気にしないで。出会った男が悪かったんだと思うよ……しかし君、酒が強いね。もう一杯どうぞ？」

空^あいていたグラスにビールを注^つがれる。万里緒は、この人にまだ一回もお酌^{しやく}をしていない、と気

づいた。

「すみません、さつきから私が注いでもらってばかり。星奈先生にもお注ぎします」

「ゆっくり飲むから、まだいいよ」

「じゃあ、次は私が注ぎますね」

「そう？　ありがとう」

「……あの、今日私と会って、どう思いました？　気が強い女だな、って思いました？」

「そうだね。でも、気が弱かったら医師は務まらないでしょ？　だからいいんじゃない？　それで」

今のままの万里緒でいいと言ってくれた男性は初めてだ。周りの友人たちもありのままの万里緒のことを受け入れてくれてはいるが、初対面でここまで肯定してくれる人はいなかった。

「あの……星奈先生は彼女、いるんですか？」

「話が飛ぶね。彼女は……いない……かな？」

『なんだ、その曖昧な返事は』と言いたかったが、やめておいた。そんな万里緒の心中を察してか、千歳がからかう。

『『なんでそんな曖昧な返事するの？』って顔してる』

「……うーん、ですね」

「正確に言うとか、もう一ヶ月くらい連絡取ってなくて自然消滅っぽい恋人はいる。いや、もうすぐ

二ヶ月になるかな？　……別れ話は、まだきちんとしていない」

「それで、教授に勧められて私と見合いをした、と」

「まあ、そうなるね」

「ちなみに、その彼女は医師ですか？　それとも看護師？」

きつと看護師だろうな、と思いながら確かめてみた。

「はつきり聞くね。君って面白いな、本当に」

膝頭がまたコツンと当たって、二人の距離がいつそう近くなる。千歳は少し目を細め、ひと呼吸置いてから言った。

「君の予想通り、看護師だよ」

「……私、何も言ってませんけど？」

「看護師って言うとき、少し語気がきつくなってたよ。それに君って……何もかも顔に出ちゃう人なんだね。言いたいがダダ漏れだけど？」

千歳は、さも可笑しそうに笑って言った。

顔に出る、というのはたしかによく指摘されてきたことだ。でも、ここ二、三年はあまり言われなくなっていた。大人になるにしたがい、思っていることを顔に出さないようにしたほうが何かと都合がいい、ということを学んだつもりだったのに……千歳は、万里緒の心の内など容易く見抜いてしまうらしい。

「星奈先生は、人の心を読むのが上手なんですね」

「だてに年は食ってないから」

千歳は万里緒よりも六つ年上だ。だから、彼のほうが上手^{うわて}だったとしても構わないじゃないかという気にもなる。

千歳は万里緒があらゐのままの姿を見せても、肯定してくれている。そのことが、とても嬉しかった。

世話焼きババアの言うとおり、必ずゲットしないと、逃がした魚は大きいと悔^くやむことになりそうだ。

そうは言っても、ゲットできる可能性はあるのか？

「星奈先生、看護師さんと連絡を取り合わなくなつてから、もう二ヶ月になるとおっしゃいましたよね。それで、教授に勧められてお見合いをすることにしたんですよね？」

「うん、そう。偶然は大事にしたい」

「偶然？」

「あの食堂で偶然会つた女性が同じ病院に勤務するドクターで、しかも見合い相手だとわかつたときは、こんな偶然あるのかつて不思議でたまらなかつた。そういう縁つて、なんだかロマンチックだと思ふんだ。しかも実際に会つてみたら、興味深い女性だつた。僕は藤崎さんのこと、結構好きだよ」

こんなにうまくいっているのだろうか。万里緒のほうこそ不思議でたまらない。

ひよつとして何か裏があるのでは、と疑念さえ湧いてくる。

「そんな顔をしなくても、裏はないから安心して。僕は本当のことだけ言つてる」

「い、いや！ 疑っているわけじゃないんですけど」

万里緒は激しく首を振りながら、言い訳がましく否定した。

それにしても、なんでこの人は万里緒の心をこんなにも読めるのだろう。エスパーか？

「あのおう、結構好きと言つてもらつて嬉しいんですけれど……」

「けど、何？」

「いや、あの、星奈先生って優秀な医師であり、しかもイケメンじゃないですか。こんなイイ男をゲットしながらない女性はいないよなあ、つて」

「それはつまり、彼女ときちんと別れて来いと、暗に言ってるわけだ？」

「いや、そう、ですね。でも……やつぱりいいです。私みたいな気の強い女より、きっと看護師の

彼女のほうが可愛いだろうから」

—— ああ私つたら、大きな魚をみすみす逃がそうとしているよ。

万里緒は自分に内心ツツコんだ。

「あのねえ藤崎さん、さつきも言つたけど、僕は可愛いだけの女に興味はないんだよね」

「……私、結構可愛くないですよ？」

「僕は可愛いと思うけど。可愛いし、面白いよね。リアクションとか、行動とか、路地裏の定食屋や青島ビールが飲める店をチョイスするところもユニークだと思う」

「そうでしょうか」

「ただね……この店に案内されて、最初はちょっとだけ君のセンスを疑った」

「へ？」

「お互いの膝が当たるような狭い席で男女が食事するなんて、その気かな？ って」

「違いますよ！ 店が狭いことは知っていたけど、膝が当たるなんて思ってもみなかったし！ そつ、それに！ ここに来ることになったのは星奈先生がそう望んだからであって、私が無理に連れてきたわけじゃないですよ！」

万里緒が力いっぱい否定すると、千歳は「ふはっ」と噴き出して笑った。

「ああ、そういえばそうだったね」

「星奈先生、ほんとにわかってるんですか？」

「わかってる。君って、からかうと面白いね、本当に」

「え？」

「別れてくるよ、ちゃんと」

「は？ あ、いいですよ。もういいんです」

「だったら君は、この見合い話がここで止まってもいいの？」

「えー……つと？ それは、どういうことですか？」

「同じ医者同士、お互いの仕事に理解がある。ついでに言うと、僕は君よりきつと収入が多い。ゲットしなくて大丈夫ですか？」

そんなふうに言われると、万里緒はもう何も考えられなくなる。

これって、間接的なプロポーズ？

こういうときは、どうしたらいいんだろう。

こんなイイ男が目の前で「自分を釣らなくていいんですか？」と聞いている。

「私は結構、気が強くて、愚痴^{ぐち}っぽいところもあるし、医師としての経験も浅くて……」

「うん、それで？」

「……本当に恋人とちゃんと別れるんですか？ そう言いながら、実はキープして二股かけようってんじゃない……」

「キープ？ キープねえ……あはは」

さつきから万里緒は笑われてばかりいる。

けれど万里緒は真剣だ。世の中には実際そうやって、二人の女性を手玉にとる男もいるじゃないか。とくに男性医師は金銭的な余裕も社会的地位もあるし、何だってやりたい放題でしょ？

「キープとかよく考えつくね。面白いけど、もっと頭柔らかくしたら？」

「柔らかいから色々と可能性を考えられるんじゃないですか？」

「そうじゃなくて」

千歳はそう言つて、ビールを飲み干した。万里緒はすかさず、彼のグラスにビールを注ぐ。

「そうじゃなくて、なんですか？」

「そういうことをしない男もいるつて、考えたことないんだ？」

「それはわかつてますけど。でも星奈先生は無駄にイケメンなんです。その歳まで、なんで独身なんですか？ 医者としても優秀で、すごくいい人だつて聞きましたけど？ 引く手数多あまたなんじゃないですか？」

『あ、失礼なことを言い過ぎた』と反省しても、もう遅かった。

「この歳まで独身だったのは、仕事に打ち込んでいたからだ。忙しく働きすぎると縁遠くなるつて、同業者だからわかるでしょ？ 言つたことを反省するくらいなら、言わなきゃいいのに」

千歳は本当にエスパーなのかもしれない。万里緒の心を完全に読みきつている。

「すみません。やっぱり私つて……気が強いんです……」

「なんか、漫才してるみたいだね、僕ら」

「私、言わなくてもいいことでも、思つたらすぐツツコンじゃう」

「君のこと、相当ツボに入つた。やっぱり、ちゃんと別れてくるよ」

「へっ？ なんて!？」

「君は面白いし、男前だし、可愛いだけの女じゃないから」

そう語る千歳の唇は、すごく魅力的だ。

でもダメ、そんなこと考えちゃいけない！ また思考を読まれてはかなわない！

どんどん思考が混乱してくる万里緒だった。

一方千歳は、「他にもこういう店を知つてゐるんだつたら教えて？」などと言いながら、膝をコツンと当ててくる。

万里緒が思わず身を固くすると、千歳は「そういうところ、可愛いと思うよ？」と、微かすかに声を出して笑つた。

完全にかかわれている。

こんな場面で女性にちよつとしたスキンシップを与えて刺激するとは、なんて上級者なんだ。連絡が途絶えて自然消滅させるなんて、看護師の彼女はなんでもつたいないことをするんだ。こんなにもイケメンで、背が高くてスタイルもよく、医師としての能力も人柄も抜群の男性を、なんでもつとしっかり捕まえておかない。

仮に千歳がきちんと彼女との関係を清算したとして、果たして自分は彼をしつかりゲットできるのか？ 前途多難な恋が始まりそんな予感がする。

千歳との見合いの翌週も、万里緒はいつも通り出勤した。

「藤崎先生、患者さんが先生とお話ししたいそうです」

看護師が万里緒に声をかけてくる。

「わかったわ。どういう用件か聞いている？」

「たぶん、不安なんだと思います。説明室をとっておきました」

この看護師は万里緒よりも年上で、経験豊富なので手回しがいい。

「ありがとうございます」

万里緒は看護師に礼を言ってから、受け持ち患者の待つ病室へと向かった。

彼女は万里緒を見ると笑顔になり、ベッドから起き上がった。

「先生、いつもすみません」

「いいえ。説明室を取っていますから、行きましょうか？」

明るく「はい」と言って万里緒のうしろについてきたが、その足取りは重く、いかにも不安そうだった。

彼女は当初、胃の痛みを訴えて受診。精密検査を行ったところ癌がんを発症はっしょうしていることがわかった。万里緒は、手術などの外科的治療が必要と判断した。そのことを本人に説明すると、彼女は「とにかく早く退院できる方法で治療を始めたい」と希望した。そこで万里緒は、さっそく外科に紹介することにしたのだ。

「先生、私なんだか怖くなってしまつて……自分から望んでおいて、すみません」

患者はひどく気落ちした様子で、下を向いている。

「先生、私、大丈夫でしょうか？ まだやることがたくさんあるし、生きていたいんです」

「大丈夫ですよ。外科の先生たちはみんなスペシャリストですから」

「そう聞いて、なんだか少し勇気が湧いてきました」

「一緒にがんばりましょうね」

彼女は会ったときよりも落ち着いた様子で、説明室を出ていった。

万里緒はひと息つき、面談の内容を記録しておくためにナースステーションへ向かった。パソコンに記録したあと、カルテにも記載をしておく。

今日は外来日なので、たくさん患者たちが待っている。

「頑張らないとなあ」

万里緒は大きく伸びをしてから、首にかけていた聴診器を外した。

外来の診療を終えた万里緒は、病棟回診に必要なカルテを取りにナースステーションへ行く。そこで、顔見知りの外科医、三枝誠（さんえい まこと）に出くわした。

「げ……」

思わずそう、つぶやいてしまった。

チャラくて面倒くさいので、あまり会いたくない先輩医師だった。

「おー！ 万里緒ちゃん」

相変わらず軽い調子だ。万里緒は愛想笑いを浮かべ、頭を下げた。

「三枝先生、ここは病棟ですの、私のことは苗字で呼んでください……」

「いいじゃん、万里緒ちゃんです。……そんな嫌そうな顔するなよ」

「いや、別に嫌というわけでは」

「顔に出てるよ」

「はあ……」

「ああそう、万里緒ちゃんから引き継いだ患者さん、新しく来た先生に診みてもらったことになったから。今、検査データをプリントアウトしてる……あ、来た。星奈、カルテはここだよ！」

星奈、と聞いて万里緒がうしろを振り向くと、そこには彼が立っていた。

「万里緒ちゃん、紹介するよ。俺と同期の、星奈千歳だ。今月異動で来たんだけど、腕はばっちりだからねー。それから星奈、この万里緒ちゃんは、消化器内科で今、唯一の女医だよ」

紹介されて、万里緒は緩ゆるく笑う。さっそく千歳と接点ができた。

「よろしくお願いします、星奈先生」

「こちらこそ、藤崎先生」

「固あじさつい挨拶すんなよ、星奈」

「普通だろ、これで。ところで藤崎先生、患者さんのことを少し聞いてもいいですか？」

「あ、はい。彼女は児童養護施設で料理を作っていて、その仕事が生きていなんです。それで、一日も早く退院して仕事に復帰することを希望しています」

万里緒が答えると、千歳はカルテを見ながらしきりにうなずく。

それを見ていた三枝が、「成長したよねえ、万里緒ちゃん」と、いきなり肩を抱いてきた。

まったく、患者の目も看護師の目もあるというのに。

「ちよっ！ 手を放してください！ やめてって、いつも言ってるでしょう！」

「いいじゃん、俺と万里緒ちゃんの仲じゃない。この子さあ、研修医で外科を回ってきたとき、俺が指導医だったんだよ」

三枝が千歳にそう説明している間に、万里緒は彼の腕から逃れた。

「でも、つれないんだよなあ。俺はいつも可愛いって言ってるのにさ」

「そういうスキンシップが迷惑なんじゃない？」

苦笑しながら答える千歳を見て、万里緒は複雑な気持ちになった。

元指導医に肩を抱かれている万里緒を見て、千歳はどう思っているのだろう。しばらく機能していなかった乙女心が稼働しだした感じだ。

でも、千歳はなんとも思っていない様子だった。

「スキンシップでもなんでもしてプッシュしないと、いつまでも元指導医のままじゃん？」

彼は、いつこうに悪びれず笑っている。そして、こんなことも言った。

「俺もそろそろ本気で頑張らないとね。星奈は教授の覚えもめでたいから、見合いの世話までしてもらえていいけど、俺は自力で相手を見つけないと。あ、星奈。ちなみに見合い相手はどうだったんだ？」

ほんの一瞬だけ、千歳と万里緒の目が合った。

『その見合い相手は私です』と万里緒は心の中でつぶやく。

「そういう話はあとで。今は患者さんのことが第一だ。本人が手術を希望しているなら、さっそく準備を進めよう。ちよつと資料をとってくる」

そう言って千歳は、ナースステーションを出ていった。

そんな千歳を見送りながら、三枝は話を続ける。

「万里緒ちゃん、あいつ、口調はおっとりしていて、実際にのんびりした性格だけど、仕事は出来過ぎ君だから安心していいよ。腕はピカイチで、何があっても動じない男だ。患者受けもいいんだよなあ、イイ男だから」

ペテラン外科医の彼がそう言うのだから、その通りなのだろう。叔母が手放しで誉めていたのもうなずける。

千歳を誉める三枝を見て、万里緒は彼のことも誉めておこうという気になった。

「先生だつて、消化器内科の看護師たちがカッコイイって騒いでましたよ？」

「マジで？　でも、星奈を見たら星奈のほうがいいと思うに決まってる。整った顔してるし、看護師にも優しいから。おまけに、のんびり屋だけど仕事は早くて的確。あいつは、どこに行ってもモテモテだ。だから、いつも女が切れない」

やや不貞腐れたように言う。

「へえ……いつもいいお相手がいるんですか？」

「そう。あいつさあ、清潔感のある顔してるだろ。だから女は警戒心を抱かずに近づけるみたい。おまけに優しいし怒らないんだよね。そういうところもモテポイント」

ため息をついて腕を組みながら、ふと思いついたように付け加える。

「もしかして、万里緒ちゃんもトキメいた？」

「は!? やめてくださいよ」

「だって俺がこんなに口説いてんのに、星奈のことじつと見たりしてさ。またかよ、って感じ」
 そういう三枝だって、何かと万里緒に絡んでくるが、彼が自分に本気でないのはわかってる。
 三枝はほかに気になる相手……というか付き合っている医師がこの病院にいることに、万里緒は薄々感づいていた。

そうこうしているうちに、千歳がナースステーションに戻ってきた。

そして、患者のカルテを万里緒の手に戻し、笑みを浮かべて言う。

「患者さんは、不安があるみたいだけど、納得はしているようだから、今日の会議で手術の日程を決めます。明後日までには外科病棟へ転科させましょうか」

手際^{てぎわ}がいいな、と万里緒は感心した。

「はい、そうしてください。それと！」

万里緒がちよつと語気を強めると、千歳は首を傾げて見つめてくる。

「患者さんのこと……どうかよろしくお願いします」

万里緒が頭を下げると、千歳はうなずいた。

「もちろんです」

その一言は、万里緒の胸に響いた。

千歳がナースステーションを出て行ったあとも、万里緒はそのまましばらくカルテを抱きしめていた。

「カッコイイですねー。言うことも素敵だったなあ。……あの人、新しい外科の先生ですか？ 名前は？」

側にいた若い女性看護師の目がハートマークになっている。

「ああ、星奈先生よ。星奈千歳先生」

「可愛い名前ですね！ いやー、嬉しい。これからここに来ますよね？」

「そうね、外科医だし」

「うっそー！ みんなに情報流そう！」

看護師は可愛い反応をする。こんなふうにピンク色に染まったような声を出したが、かつて一度でも万里緒にあっただろうか。たぶん、ない。

「星奈先生って、彼女いるんですかねえ」

「……っ、さあね」

「久しぶりに、なんか嬉しいですよー」

先ほどのナースはナースステーションにいる同僚を集め、さっそく千歳の噂話を始めた。若い女性看護師たちの頬が次々とピンク色に染まっていく。それを見て、万里緒はまたため息をつく。

万里緒も三十歳になったとはいえ、病院ではまだ若い部類に入る。だが中身がオヤジだということとは、嫌でも自覚せざるを得ない。ビールが好きだし、焼酎^{しょうちゅう}も好きだ。一人で三軒ハシゴすることもある。過去には、一度だけが朝起きたら枕に砂がたくさんついていたこともある。

そんな万里緒に、女なら誰でも目の色を変えて騒ぐような千歳が振り向くだろうか。

「あり得んだろ、やっぱり」

万里緒は彼にトキメキっぱなしだが、自分の器量では彼を捕まえられる気がしない。

「あり得んけど、頑張りたい気もするんだよね……」

「藤崎先生、さっきから何をつぶやいてるんですか？」

ナースに言われ、万里緒は「こつちのこと」と曖昧に答えておいた。

そして、今は仕事に集中しようと頭を切り替えた。

* * *

今日も遅くなった。そう思いながら、千歳と出会った食堂へ向かう。

夜は居酒屋として営業しているので、深夜十二時まで店は開いているのだ。

「なんか、疲れてるね、マリちゃん」

「そうなんですよ。おじさん、ビールと……っ」

店の中を歩きながら言いかけて、目の前に千歳がいることに気づいた。

千歳は食事の途中らしく、箸はしを持ったまま、万里緒を見てにこりと笑う。

そして、どうぞ、と言わんばかりに、隣の椅子いすを引いた。

万里緒は促されるまま、千歳の隣に座る。

「ビールと、いつもの日替わりを」

「今日はマリちゃんの好きなビールがあるよ、ほら！」

「青島ビール！ 仕入れたんですか？」

「そうだよ」

ニコニコ顔のおじさんに万里緒も笑顔になる。大好きな青島ビールを見てテンションが上がった。が、ふと気づいて隣を見ると、千歳は案の定、笑いを噛み殺していた。

「好きなんだね、青島ビール」

「好きなんですよ、青島ビール」

千歳は、飾りボタンがついたシャツとチノパンという格好だった。とってもよく似合っている。

「そういえば今日、星奈先生のこと、看護師たちがカッコイイって噂してましたよ」

言いながら自分のグラスにビールを注つぐとすると、千歳がそっとビール瓶びんを奪う。

「女の人が手酌てじやくすると嫁とつぎ遅れるらしいよ」

「マジですか？」

「ずっと手酌てじやくだったよ、と内心ツッコんだ。

「迷信だと思うけどね」

そんなやりとりをしている間に、日替わり定食が出てきた。今日はトンカツと野菜炒めだ。さっ

そく手をつけると、トンカツの衣がサクサクして美味しかった。

「二人とも知り合いかい？」

店主のおじさんが聞いてくる。

「職場が一緒なんですよ」

千歳が答えると、店主は「そうかい」と答えながら隣のテーブルの片づけを済ませ、去っていった。

「そうそう。見合いの日、君に会ったあとすぐに、彼女ときちんと別れたよ。彼女のほうも別れたつもりになってたらしいけど……けじめ、つけたよ」

万里緒が黙っている、「何か言うことない？ 藤崎さん？」と返事を促された。

「……本気ですか？ あり得ないんですけど？」

「何があり得ない？」

「私を選ぶなんて！ もっとこう、うちの看護師みたいな可愛い、ピンクナース的な女性のほうが……」

言いかけて、やめた。千歳が笑ったからだ。

「ピンクナースって何？」

「うちの病院の看護師たちが、星奈先生を見て頬をピンクに染めていたから。そういう素直で可愛い反応をするナース、って意味です」

「君は頬を染めてくれないの？」

千歳は、とんでもないことを言う。

「可愛いだけの女性は好みじゃないって言っただけだよ」

「いや、だからですねえ、星奈先生みたいな、優しくて女の人を切らさないような恋の上級者が、私を選ぶなんてあり得ないんですよ。私、中身はオヤジ系だし」

「そこがいいって言ったのに」

そう言っ、にこ、と笑う。

「面白がつてるだけでしょ？」

「もうすぐ三十七のオッサンは、これでも真面目に考えてますよ」

万里緒は言葉に詰まり、箸を動かす手も止めてしまっていた。

「本気にしますよ、色々と」

「本気にしてよ、色々と」

それから千歳は、笑いを噛み殺して続ける。

「やっぱり、僕ら漫才してるみたいだ」

「途中で、心変わりされちゃ困りますよ」

「君こそ、心変わりしないでよね、万里緒さん」

クルリとした目を細めながら、千歳は言った。

「教授にも言つてあるから。見合い話は進んです、つて」
クラツとする。

こんなことが、オヤジな自分の身に起こるなんて。まったく、なんてこったい。

「嫌なの？」

「まさか！ ただ、信じられないだけです。本気ですか？」

「……早く、ご飯食べたらず？」

千歳は万里緒の膳を指差し、早く食べろと促す。千歳はすでに食事を終えている。

万里緒も急いで食べて、ビールも飲み干す。

「お会計、お願いします。二人分ね」

「はいよ！」

千歳はさつと立ち上がり、万里緒の分の会計も済ませてしまう。万里緒も遅れて財布を取り出しただけ、払わせてはもらえなかった。

店を出るとき、店主のおじさんに「マリちゃん！」と呼び止められた。

「はい？」

「頑張れよ！」

「何を？」と聞く前に千歳が店を出たので、慌ててあとを追う。

店外に出ると、千歳は少し行つたところで待っていてくれた。

「家まで送ろうか。車、すぐそこに停めてあるから」

「あー、遠慮しておきます。私の家、ここからちよつと離れてますし」

「いいよ」

それだけ言つて千歳が歩き出してしまったので、万里緒も仕方なくついていく。

近くの駐車場には、黒のジープが停めてあつた。

「これが星奈先生の車？」

「海に行つたり、山に行つたりするから、大きな車にしたんだ。今年は一緒に行く？」

「さあ乗つて」と促されるままに乗り込むと、新車の匂いがした。車高が高く、なんだかとても見晴らしがいい。

「この車、まだ新しいみたいですね。あ、でも、本当にいいんですか？ 家まで送つてもらつて。それに、さっきの話ですけど……」

言いながら万里緒が千歳のほうに顔を向けると、彼の大きな手が頬に触れ、頬のラインに沿って滑つた。それから後頭部をしっかりと掴み、固定される。

何も考える間もなく、気がつけば唇を塞がれていた。

「ん……」

重ねるだけの軽いキス。次いで、角度を変えてもう一度唇が重なる。

『優しいキスだな。星奈先生はこんなキスをするのか』と万里緒は思った。

まだ付き合ってもないのにキスしてしまったていいのだろうか、と躊躇う気持ちもあるが、あまりの心地よさに彼に身体を委ねる。

そんなことを考えている間もキスが止むことはなく、千歳は自分の唇で万里緒の唇を挟み込み、ゆつくりと啄むように弄ぶ。

会ったばかりの人だというのに、こんなにも自然に唇を許してしまっているのが、なんだか不思議だった。

でもそれくらい、万里緒は急速に千歳に惹かれている。

この唇を、ずっと感じていたい。

だけど、柔らかく心地よい唇は、万里緒から離れようとしていた。

離したくなくて唇を追うと、もう一度柔らかい感触が重なる。

それから少し濡れた音を立て、今度こそ唇は離れていった。最後、彼が軽く唇を吸ったから、妙にリアルな音がした。

千歳の顔を見ると、彼の唇は濡れて光っていて、ちよつとエロい。

千歳は唇を離れたあと、大きな手で万里緒の襟足を撫でている。なんだか大人な仕草に感じて、ドキドキした。

「この通り、僕は本気だよ」

本気、と聞いて万里緒は小さく何度もうなずいてから、ようやく言葉を紡いだ。

「唇がすぐく柔らかくて、痺れました。想像通りです」

「……そんな面白い答えが返ってくるとは思ってもみなかったよ」

笑いを噛み殺す千歳。

「あ、いや、じゃあ、お友達から始めます？」

「どうしてそんなに変な答えばかり用意してんの？」

「変じゃないですよ！」

「大人の付き合いから始めようよ、万里緒」

突然、名前を呼び捨てにされて頭がクラクラしてきた。

「君は、最初から僕と結婚を意識して付き合う気はないの？」

このキュートで整った顔のイケメンが、自分と結婚？

「……私の何をそんなに気に入ってくれたんですか!？」

「何もかも。強いて一つ挙げるなら、万里緒の唇が柔らかくて痺れたから、かな」

千歳はそう言っ、もう一度キスをする。片手で万里緒の後頭部を掴み、もう一方の手は背中を抱きしめて引き寄せる。

今度のキスでは口の中に舌を挿し入れられ、もっともっとクラクラした。

唇を離れたあと、万里緒は真剣な顔で千歳に言った。

「気に入ってくれて、ありがとうございます」

大真面目に言っているのに、千歳は笑う。

「……僕を笑わせようとしてんの？　僕は真面目に言っているのだから茶化さないで」

「もちろん茶化してなどいません！」

万里緒は強く言った。

4

先日、キスまでした相手が今、隣に座ってお酒を飲んでいる。

今日は消化器内科と消化器外科の医師グループが集まり、新任の星奈医師の歓迎会が開かれているのだ。

場所は病院近くの居酒屋で、ギョーザと鍋が美味しい店。万里緒はたまにここで一人、ギョーザとビールを頼んだりしている。オヤジっぽい趣味だけど、普段はそんなこと気にしない。

でも、今は気になる。星奈千歳のせいだ。

彼が隣に座ると、意識してしまい、女としての恥じらいが芽生える。大好きなビールやギョーザが進まない。

星奈先生、別に隣に座らなくてもいいんだけど……と思いながら、万里緒はビールをちびちび舐

めていた。

「万里緒ちゃん、飲んでる？」

「はは、飲んでます。三枝先生も飲んでますね」

「当たり前じゃん。飲み会は飲むもんだ」

とはいえ万里緒は、飲んでもいまだ、さっぱり酔わない。

「星奈あ、隣に座ってるんだから万里緒ちゃんにビールを注いでやれよ？」

三枝はそんなことを言いながら千歳に近づき、彼の肩に腕を回した。

「いつの間にか、ちゃっかり女の隣に腰を落ち着けてるんだから、やらしいな、星奈」

なんて嫌味も言う。

「飲み過ぎじゃないか？　三枝」

千歳はそれに、苦笑しながら答える。

淡々とした口調、低いけれど甘い声。

声まで好みだよチクショウ、と万里緒は心の中でジタバタした。

何もかも好みにぴったりの千歳。ふいに、そんな彼と先日車の中でキスしたことを思い出す。

しかもそのあと、万里緒を家に送り届けながら、こう話してくれたのだ。

三枝に、万里緒と見合いをしたことを打ち明け、結婚を前提に交際をスタートし、話は順調に進んでいるとも伝えた、と。